

令和 2 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372101006		
法人名	特定非営利活動法人今が一番館		
事業所名	グループホーム今が一番館 西棟		
所在地	020-0624 岩手県滝沢市妻の神157-3		
自己評価作成日	令和2年10月19日	評価結果市町村受理日	令和3年1月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>『今が一番』安心して下さい いつもあなたの傍に私があります』の介護理念に基づき、利用者に寄り添い安心、安全に生活できるような支援を行えるよう努力している。 職員一人ひとりが年間業務目標を設定し達成努力している。</p>
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>施設長の統括の下に東西2ユニットで運営されるグループホームである。運営の方針や内容に大きな違いはないが、一日の過ごし方、食事のメニュー等、それぞれ特色のあるユニットづくりをしており、利用者の雰囲気にも特徴がある。独立した生活領域を保ちながらも行事等で連携、協力して生活してきたが、新型コロナウイルス感染防止のため、ユニット間の交流を抑え、家族の面会も玄関のドア越しに行うなど、異例づくめの運営になっている。こうした中、毎年恒例の季節に合わせた諸行事をユニット別で漏れなく実施しており、利用者に対する職員のきめ細かい気遣いが感じられる。また、家族とのコミュニケーションづくりにも腐心しており、毎月、一人一人の利用者の生活の様子について写真を添えて家族にお便りの形で報告し、喜ばれている。業務の推進に当たっては、2ユニットのメリットを生かし、合同で業務に取り組む各種の委員会を組織し、業務の効果的な取り組みや改善課題の解決に努めている。</p>
---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和2年12月16日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに ○ 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが ○ 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが ○ 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員一人ひとりが理念を理解、共有し支援を行っている。	開設時から大切にしているホームの理念「いつもあなたの傍に私達があります」を、利用者一人一人の暮らし方にあわせてケアプランに具体的に落とし込み、心身ともに傍に寄り添う支援を実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染拡大防止のため地域交流等は行っていない。	例年、地域行事への参加、小学校、幼稚園との交流、地域ボランティアの協力等、地域との繋がりは生活の一部になっているが、今年度は地域行事が中止になり、ホーム行事への地域招待も全て自粛している。そうした中でも、夏の「認知症カフェ(オレンジカフェ)」に利用者2名が参加し、「認知症まちかど相談室」も開所し4人程の相談に乗っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	上記と同じ理由により制限しているが、認知症まちかど相談など、非接触でできる活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍もあり本年度は会議を行っていない。10月27日に会議開催予定である。	4月以来開催を中止し、恒例の運営推進会議メンバーによる食事会も取り止めたが、10月末に本年度初めて開催した。コロナ禍の中での利用者の生活の様子、家族との連携等、ホームの運営状況を報告し、活発に話し合いを行った。12月以降も出来るだけ継続して年度内の会議を開催する予定である。また、取り組みの報告に加え、テーマを設定するなど、よりグループホームへの理解が進むよう開催内容を工夫したいとしている。	ホームからは主として施設長、ユニットリーダーが出席しているが、地域密着型施設における運営推進会議の意義、役割等を理解してもらう上で、職員にも交代で出席してもらうことが期待されます。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	社会福祉協議会、地域包括支援センター等に相談、援助を受けている。	施設長始めユニットリーダーが市の担当者と緊密に情報交換し、制度の内容確認等を行っている。市内のグループホームが協力して運営する「オレンジカフェ」やホームが運営する「認知症まちかど相談室」に地域包括支援センターの支援、協力を得ている。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	三か月に一回身体拘束委員会を開催。月一回の勉強会にて身体拘束廃止いわて宣言を職員全員で唱和している。職員全員が身体拘束の行為を理解し毎日の支援を行っている。	施設長、ユニットリーダー、看護師、両棟職員各2名によるユニット合同の「身体拘束廃止委員会」を開催している。委員会では、具体的に特定の利用者のケーススタディを行い、「フィジカル・スピーチ・ドラッグ」の三つの拘束に繋がるデータを確認しながら、例えば、どのような声かけや対応で穏やかさを取り戻したかなどをまとめ、定例の「職員勉強会」に提示し、具体的に話し合いを行うなど、身体拘束のないケアについて、職員間で共有している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	コロナ禍、外部研修会に参加する事が難しい中、職員一人ひとりが虐待に関して学習、自覚を持ちながら支援している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員一人ひとりが学習し情報の提供を行い話し合いながら支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設長が対応しているが、施設長不在時は計画作成担当者が説明を行い契約をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会制限もありドア越しの面会となっている。職員が生活の様子を伝え家族からの要望を聞き支援につなげている。	コロナ禍により家族が利用者と直接面会することは制限しており、電話等で連絡を密にするよう努めている。毎月、一人一人の利用者の通院、食事、体調等、生活の様子をスナップ写真とともに家族に報告しながら、意見、要望等を出してもらうようにしている。また、広報紙をユニット毎に隔月発行している。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝の申し送り、月一回の勉強会、気づいた時にはその都度話し合いの機会を設けている。	毎週月曜日の施設長、両ユニットリーダーによる「業務連絡会議」、毎朝の申し送り、毎月の「職員勉強会」等で職員から意見、要望等が出される。「職員勉強会」では、業務毎に構成する各委員会(危機管理、レク、広報)から報告や業務改善提案があり、話し合いのうえ、集約、共有化されている。開設16年を経過し、施設や設備の小修繕の要望が増えて来ている。また、目標管理制度により、各職員が目標を設定し、資格取得、研修受講、自己研鑽等、介護技術の質向上に向けて取り組んでいる。施設長は、夜勤の時間等を活用して職員と個別に話し合う機会をつくっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	目標管理表、職員能力評価シートを用いて現状の能力を適切に判断し評価を行っている。また、保有資格を判断材料に取り入れ、個人の努力が反映される給与体制を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年度初めに自己目標を設定し、その内容を上司が把握し、サポート出来る体制を整えている。自己目標で本人の希望する内容や個人のレベルアップに必要と思われる研修が受講出来るようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、交流は控えたが、メール、電話等で情報収集、意見交換などを行っている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に、自宅、施設、病院等を訪問し情報を頂き本人との会話の中から安心して入所できるよう支援している。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時に家族、本人の情報、要望等を伺い信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族からの聞き取り、センター方式等で情報を収集し本人に合ったサービスの導入に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者一人ひとりの生活状況、リズム等を観察し、職員、他の利用者との関わりの中で、その人らしい生活ができるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との面会制限がある中で、来所時に現在の様子を伝え要望を伺い対応している。また月末には、その月の生活状況を報告書にて伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	電話を掛けられたり手紙を書く事が出来る利用者には、家族、友人、知人とのやり取りができるよう支援している。	8月頃までは、友人、知人が訪ねて来ていたが、現在は接触を控えており、電話や手紙のやり取りを希望する利用者を支援している。ユニット合同の行事も、今年は西棟、東棟それぞれで取り組んでいる。ドライブで近郊の馴染みの場所を周遊する機会をつくっている。馴染みの美容師がユニット別に月1回来所し、カットしてくれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者一人ひとりの性格を把握し、皆がレクリエーション、行事等に参加できるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談がある時には受けながらその時点で必要なサービスを紹介している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりが満足して毎日を過ごせるよう職員が状態、状況を観察、共有しケアを行っている。	利用開始時点から、本人の話す内容は全て記録し、センター方式の様式に整理し、利用者一人一人の全体像がイメージ出来るようようになっている。利用者個々に寄り添える時間をつくり、会話をしながら、また意思表示が難しい方は表情、動作、仕草等を観察しながら、日々変化する状態や思い、意向を把握するよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族、本人から生活歴、嗜好、癖等の情報を収集しサービスにつなげている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体調の観察、今できること等の観察を行いながら、その人らしい生活が送れるよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎朝の申し送り、引き継ぎ時に状態を話し合いカンファレンスにつなげている。ご家族の意見を取り入れながら計画の作成を行っている。	特に居室担当者を割当てしておらず、職員全員で日々の申し送りや毎月の職員勉強会でモニタリングを行い、気になる点等を計画作成担当者がカンファレンスシートにまとめ、現状に即したケアプランになるよう必要な見直しを行い、プランを変更している。プラン変更に当たっては、来所した際に家族から意見や意向を確認してきたが、本年度はコロナ禍のため郵送で確認、了承を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の行動、状態等を記録、職員間で情報の共有をし話し合い介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の状態、状況等に合った生活ができるよう支援している。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍もあり本年度はインフォーマルな社会資源の導入は難しかったが、行政などのフォーマルな社会資源の利用は行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎年健康診断を行い、健康状態の把握に努めている。かかりつけ医の通院には看護師、職員が付き添っている。専門医や、かかりつけ医以外の受診は原則家族に行っているが、家族の都合が悪い時には看護師、職員が同行している。	利用開始時に本人、家族に説明し、これまでのかかりつけ医を可能な限りホームの協力医に代えてもらうようにしており、通院には職員が同行し、健康状態等の情報を伝え、適切な受診になるよう支援している。また、専門医の診察を必要とする場合には、協力医から紹介状を書いてもらい、円滑な受診になるようにしている。歯科治療は近所の歯科医に通院している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	朝の申し送り時看護師に日々の様子を報告、相談を行っている。通院は原則看護師が同行しているが、状態により看護師の指示を受け職員が同行することもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には早急に情報の提供を行っている。家族、病院の相談員、看護師と連携を取りながら早期に退院、ホームに戻られるよう支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族の意向を確認し、かかりつけ医の協力の下ターミナルケアを行う契約を行っている方もいる。かかりつけ医の受診、指示を受け救急搬送、入院、終末期を迎えられている方もいる。終末期に関しては入所時、家族に説明行い同意を頂いている。	利用開始時に、「重度化及び看取り指針」に基づき、重度化は医療行為を要しない限り、また終末期には、かかりつけ医の協力を得られる場合は対応出来ることを説明し、同意を得ている。これまで10人を超える利用者の看取りを行っている。現在、102歳の寝たきりの利用者があるが、最近、かかりつけ医から看取り診療を止めたいとの申し出があり、医療連携体制の再構築が課題になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時に対するマニュアルがある。看護師に相談、指示を受けながら対応している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の緊急連絡網、役割分担表を作成し共有している。 危機管理委員会を設置し、必要物品の購入、管理を行い全職員が利用方法を周知している。	ユニット合同の定期的防災避難訓練を毎年度2回実施しており、本年度は5月の火災避難訓練を行うことが出来たが、夜間避難訓練を予定していた2回目を見送っており、年度内に実施したいとしている。訓練には、運営推進会議メンバーや近隣の住宅団地の方々の協力を得るよう働きかけている。両ユニットの職員各2名で構成する「危機管理委員会」を中心に、防災マニュアルの見直し、避難訓練計画の作成、防災関連の勉強会、備蓄物品の管理等、防災対策に積極的に取り組んでいる。	利用者も含め火の取り扱いを学ぶため、あえてIH調理器を導入せず、ガスを利用するなど、日頃から防火意識の醸成に取り組まれているが、防災避難訓練については、定期的の訓練に加え、リハビリも兼ねて避難経路を歩くなどの「ミニ避難訓練」を日常的、継続的に実施することも期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとり状態を把握しながらコミュニケーションをとり抑制的な言葉など使わないよう支援している。 トイレ、入浴時など特にプライバシーを損なわないよう、声掛け、介助行っている。	利用開始時に、利用者への名前前に「さん」を付けて声がけすることで本人や家族の了承を得ている。入浴やトイレでの介助でも、本人の気持ちを大切にしながら適切な対応になるよう心掛けている。また、居室入室の際は「とんとん」と声掛けしてから入り、みだりに私物に触れない、ケース記録等は数字やイニシャルで表記するなど、プライバシーの確保や個人情報の取り扱いにも留意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表現したり、自己決定できるように働きかけている	掃除、洗濯、洗濯物干し、洗濯物たたみ、食事の準備、片付け等、手伝いができる利用者には声を掛けながら行っていたりしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の状態、状況等を観ながら一人ひとりのペースで生活ができるよう支援している。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、外出時に利用者本人が自分で出来る範囲の身だしなみができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むきなどの食材の下拵え、味見、盛り付け等出来る範囲で食事作りに参加できるように支援している。	ユニット別に当日の調理担当者が冷蔵庫等の食材や利用者の希望をもとに献立を決めている。買い出しは西棟、東棟が交代で週2回程度まとめ買いをしている。最近は利用者の同行は止めている。利用者は下準備や後片づけ等、それぞれ出来ることを手伝っている。職員は、介助が必要な利用者を手伝いながら、一緒に食事を摂り、和気あいあいの食事風景となっている。定期的に隣接のデイサービス調理師から摂取カロリー量等、必要な助言をもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	下膳時に摂取量を確認し記録している。状態、摂取量により看護師、医師に相談し経腸栄養剤(エンシュア、ラコール)の提供行っている。状態に応じた食材の形態(お粥、刻み、とろみ等)を調整し提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、食事後に口腔ケアを必ず行い、本人の状態により声掛け、介助を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの様子を見ながら声掛け、誘導し、排泄の自覚のない方には定時に声掛け誘導を行っている。	昼間は、おむつの方1名を除き、適時な声掛けにより、トイレで用を足している。布パンツ、リハビリパンツ、さらにリハビリパンツにパットを補強する方など、状態に合わせて排泄用品を利用している。夜間は、西棟では声掛けによりトイレに立つ人が多く、東棟は1人で立つ人が多い。自立や現状維持に向けた支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の確認は毎日行い、便秘時は看護師に相談し、下剤にて調整を行っている。朝食事に牛乳、昼食時にヨーグルトの提供行っている。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	入浴の希望に添って入浴していただいているが、転倒、溺れ等の危険があるため、職員が見守り、声掛け、介助等を行っている。	両ユニットとも毎日入浴出来るよう準備している。利用者は週2、3回、13時から16時の入浴を基本としているが、希望がある場合は、午前中や毎日の入浴も対応している。2人が入れる広めの浴槽で1人ずつゆっくりと入浴してもらっている。寝たきりの方は、2日に1回のシャワー浴で対応している。菖蒲湯や柚子湯等、季節を楽しめる工夫をし、利用者は、職員と談笑したり、歌を唄うなど、入浴を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転の無いよう一人ひとりの生活状況を観察し、声掛け見守りながら支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の効能を調べ服薬状況を観察している。特変時は看護師に連絡、助言を受けながら対応を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入所前の生活歴、嗜好等を家族より聞き取り、本人が楽しみとしていた事ができるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍もあり、行えていない。	コロナ禍の中で外出の機会が少なくなっているものの、高松の池や雲石等、近郊を周遊ドライブし、外の景色を楽しんでもらえるよう努めている。ホームの敷地は広く、天気の良い日は、ユニット毎に往復100mを散歩している。園庭で食事をすることもあり、出来るだけ外の空気に触れる機会を作っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理が自分で行える利用者には、自分で行っていただいている。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム今が一番館 西棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	外からの電話の取り次ぎ、本人の電話希望、手紙のやり取り等が不自由の無いよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールには雑誌、新聞が置いてあり自由に読まれている。テレビも自由に観ることが出来るよう配慮している。室温、照明、テレビの音など職員間で声を掛け合い調整行っている。	デイサービスの入り口を挟んで、東西のユニットが左右対称で同じつくりになっている。大きなテーブル2脚に4、5人で座り、それぞれ、テレビを見たり、好きなことに興じたり、ゆっくりと寛いでいる。大型エアコン、温風ヒーター、加湿器等で適切な温湿管理を行っている。小上がりになっている8畳の和室は、普段は鉢植えを置いたり、洗濯物をたたんだりして活用しているが、看取りが近づいた方に他の利用者と一緒に過ごしてもらえるよう利用することもある。東棟では猫2匹も一緒に暮らしており、利用者の方々の癒しになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	職員が声掛け行い、利用者同士が話し合えるよう支援をしている。 様子をみながら一人になりたそうな時には、居室へ誘導を行い休んで頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の作った作品や、昔の写真、家族との写真を飾ったり、自宅で使用していた家具を置き本人が居心地良く過ごせるようにしている。	居室には、ベッド、温風ヒーター、大きなコルクボードが備え付けられている。カーテンで仕切られた奥行きのあるクローゼットには、衣装ケースや小タンスに衣類等が収められ、清潔感があり、居心地のよい居室環境になっている。ボードには手作り作品や家族写真等が貼られ、自分好みで居心地のよい居室づくりを行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの入り口前には大きく「トイレ」と書いたものを貼っている。ホール内は段差のない作りになっている。		